三　あきらめるな！

「寒い。あちこち痛い。手がしびれてきた。」

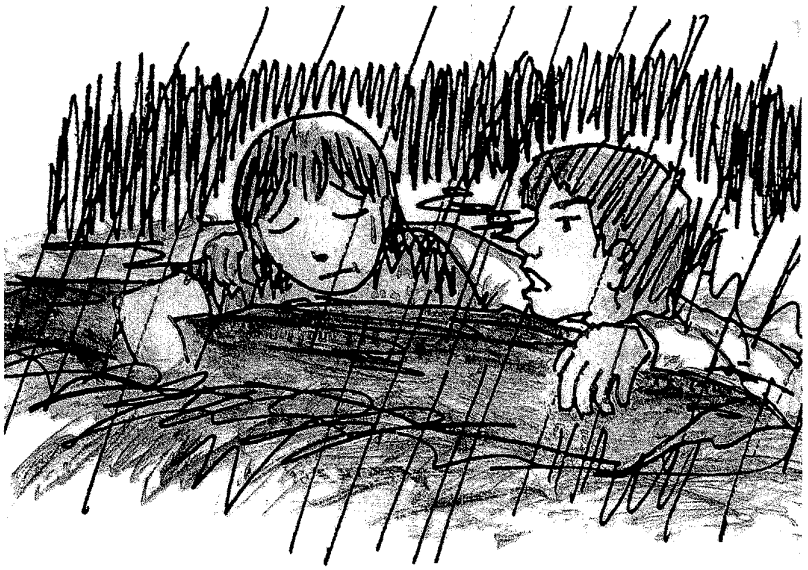
「もうだめだ、わたしはここで死ぬんだ。」

国道十号線の堤防の上を走って逃げようとしていたとき、大きな地響きとともに発生した土石流にはじき飛ばされ泥の海にたたきこまれたわたしは、何とか海面に顔を出すことができたものの、暗い泥の海の中でたった一人死の恐怖におびえていた。

そのとき、顔や腕に傷を負い泥まみれになった男の人が「あきらめるな、手を離すな！」と言いながら近づいてきた。そして、恐怖と孤独に負け、今にも海の底へ沈もうとしているわたしを、転覆したボートまで押していき、そのボートの上に押し上げてくれた。

あの人が来てくれなかったら、わたしは力尽きて真っ暗な泥の海に沈んでいただろう。

平成五年（一九九三年）八月六日。鹿児島地方を襲った集中豪雨は、一時間に五十ミリを越える猛烈なものだった。そして、それにとどめを刺すように間髪を入れずやってきた台風十三号。



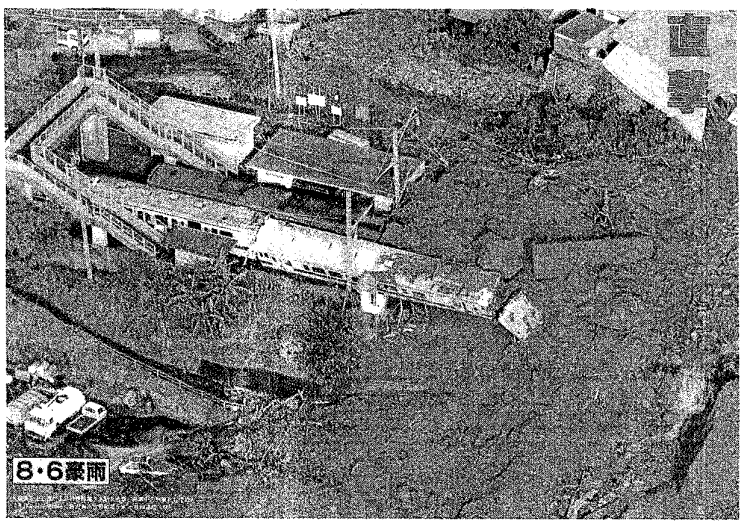
百年に一度といわれた出来事で、県下の死者は百十八人、行方不明一人という大惨事となった。

夏休みが始まってから毎日だらだらと過ごしていたわたしは、その日、父や母の小言から解放されたくて、重富の友達の家に遊びに行き、帰りにその大惨事に巻き込まれてしまったのだ。

夕方友達の家を出たとき、すでに雨の降り方が異常だということに気付いた。が、そのときはそんなにも恐ろしいことが起こるとは想像もできず、ただ急いで帰らなければと思うだけだった。

わたしの乗る列車は、数分遅れで出発できたため、わたしをはじめ他の乗客たちも、ほっとした表情をしていた。

そして列車はいつもと同じように竜ケ水駅に着いた。ところが、発車の時刻になっても動かない。かなりの時間が過ぎてから「雨が強くなってきたため、しばらく出発を見合わせます。」というアナウンスが流れてきた。外を見ると、大粒の雨が道路に叩きつけるように降り、列車の窓をすごい勢いで流れ落ちるのが見えた。まるで滝の中にいるようだった。わたしは急に不安になった。おそらく他の乗客たちも同じ気持ちだっただろう。初め大きかった話し声が次第に小さくなり、表情もすっかりこわばり、話をする



南日本新聞社　報道写真集　'93夏　鹿児島風水害Ｐ４～５

人もいなくなっていた。

そろそろ出発するのかと思った時、前方の山が崩れ落ちるのが見えた。一瞬頭が真っ白になり、体が震えた。行き場のなくなったわたしたちは、駅の下の国道へ避難することになった。

隣の人の声も聞こえないほど強く降る雨、不気味な雲、後方の山から聞こえる地響き。わたしの恐怖心はさらに大きくなった。それでも山から離れればきっと大丈夫だと思い、急ぎ足で列車を降りた。しかし、目の前の国道も膝（ひざ）までつかるほどの川になっていて、それ以上先へ進めなかった。わたしたちは完全に行く手を閉ざされてしまった。

その時、「バリバリッ！」という音がした。と同時に、後方から泥水が流れてきた。振り向くと、すぐ後ろの山が崩れ、大きな岩がさっきまで乗っていた列車を押しつぶしていた。列車を降りるのが数分遅れていたら・・・。そう思ったら怖くて足が動かなくなった。

そのとき、だれかが、「崖（がけ）の斜面に人がいる。」と叫んだ。それを聞くなり、そこにいた二人が、とっさに助けに行こうとした。たまたまそこに居合わせた警察官だった。他の人たちは、「やめた方がいい。また崖が崩れるぞ。」「高圧線の鉄塔が倒れてバチバチいってる。」と口々に叫んだ。しかし、二人は必死の形相（ぎょうそう）で川のように水が流れる線路を渡り、倒れている高圧線をかわしながら列車の前を横切って、走っていってしまった。

数分後、警察官二人はずぶ濡れになって、足の不自由なおばあさんを背負い走って降りてきた。そうするうちに、また不気味な地鳴りが始まった。

その警察官はおばあさんを降ろすと、今度は降りしきる雨の中、警告を無視して車の中から降りようとしなかった人たちの所へかけていった。そして「車から逃げろ、早く海岸に逃げろ！」と大声で叫びながら誘導を続けた。

恐怖のために足がすくんで動けないわたしは、海岸の方へも行けず、まだ谷の下側の危険な場所にいた。わたしの周りには十人ほどいたが、皆わたしと同じようにパニック状態で、中には泣き出している人もいた。

その時、また大きな山鳴りが発生した。山全体が今にも覆いかぶさってくるようだった。

必死に車の人の方たちを避難させていた警察官は、わたしたちに気付き、こちらに走って来た。そして、棒立ちになっているわたしたちに、大声で危険を伝え、励ましながら、自分についてくるように言った。

わたしは、突然の悪夢のような出来事に気が動転し、ずっ

と（自分は死ぬんだ、きっと死ぬんだ。）と心の中でつぶやいていた。しかし、そんな状況の中でも少しもひるむことなく、汗まみれ泥まみれになりながら大勢の人を誘導してくれる警察官がいる。（もしかしたら、この人についていけば助かるかもしれない。）という気がした。そう思ったのはわたしだけではなかった。皆がその人の後をついて走り出していた。しかし希望を持ったのも束の間、堤防の上を走っているとき、急に襲ってきた大規模な土石流に巻き込まれ、全員海に投げ出されてしまったのだ。

海底に沈んでいく自分が分かった。息ができない。苦しい。足が折れたのか、ものすごく痛い。もうろうとした意識の中で（やっぱり嫌だ。まだ死にたくない。）という思いがこみ上げてきた。いつもはうっとうしいと思っていた家族の顔が走馬燈のように浮かんだ。無意識に手足を動かしたのだろう、沈みかけた体は浮上し、海面に顔を出すことができた。

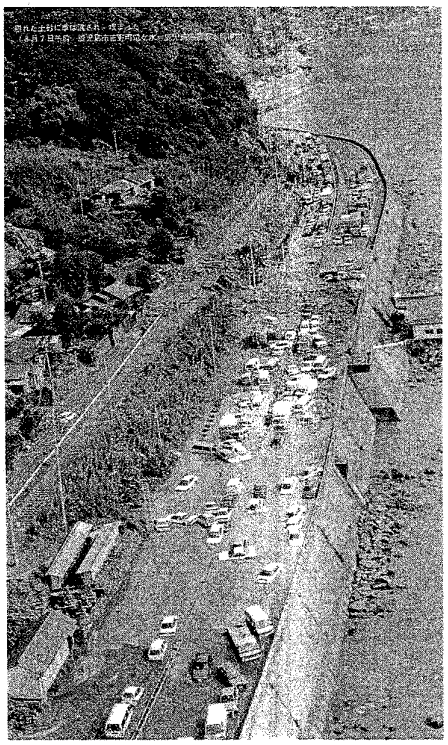
薄暗い泥の海に浮かんだ流木。助けを求める人の声。叩きつけるように強く降る雨。まさしくそこは修羅場だった。そのとき、「大丈夫か、頑張れ。」という声が聞こえてきた。しかし、助けに来たその人自身も全身泥だらけで疲れ切っている様子だったので、いくら頑張っても無理だ、助かるはずがないと思った。ところが、その人はわたしのつかまっている木片をつかむと、岸へ向かって泳ぎだしたのだ。泥や雨のためになかなか前へ進まず、わたしにはただその場でもがい

ているだけのように思えた。それでも、その人はわたしに声をかけながら泳ぎ続けた。そのうちに、だんだん岸が近付いて来るのが見えた。助かるかもしれないと思ったとき、わたしにも少し力が湧いてきた。そのとき、わたしはその人が、おばあさんを救出し、車から逃げ出した人たちを誘導していたあの警察官だと気が付いた。

その後わたしは、フェリーに救助され一命を取りとめることができたのだ。

最後まであきらめずに立ち向かった警察官のおかげで、わたしは助かった。

翌々日の新聞で、あの日の出来事を詳しく知った。そして、わたしを助けてくれた警察官は、検問のためにたまたま竜ヶ水駅の下に来ていたということ、その人自身も救助に当たっている間中、土石流に巻き込まれたり、海中に転落したりして、何度も死に直面していたということを。



（南日本新聞社報道写真集 P27）